想い守る為に クロノ編

偽善者と書き道化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
想い守る為に　クロノ編

【Ｎコード】
Ｎ３９６５Ｒ

【作者名】
偽善者と書き道化

【あらすじ】
想いを守る為に　が思ったより好評だったので、今回はクロノ視点のを書いてみました。

（前書き）

やっぱり、設定は滅茶苦茶です。

それでも言い方はどうぞ…。

「坊主、生きてるか！？」

声が遠くから聞こえる…。

「ガゼル！
お前がここで奴らを足止めしろ！！」

「了解！
おさらばです……隊長！！」

聞こえる悲鳴。

聞こえ叫び。

聞こえ想い。

止めてくれ！

もう、ボクを庇おうとするな！！

キミ達だけなら逃げ切れる筈だ！！

「キミが私達に念話を送った…」

「はい、早く魔法陣に！」

「……いや、私はどうやら行けないようだ」

止めろ！

キミは息子がいるのだろう！

帰ったら息子と遊園地に行くのだろう！！

「坊主…。

聞こえていたらでいい。

お前は生きろ。

いくら大人ぶっても、いくら執務官と言われても……お前は子供だ」

分かった！

だからキミも生きてくれ！

頼むから……

「坊主のデバイスに私達の遺言を……“想い”を託した。
坊主、息子を頼む。
ロウファはいい子だ。
私とあいつの自慢の息子だよ」

やめてくれ！

もう……もう、誰かが僕を守って死ぬのは見たくな…。

「チッ……もう来たか」

「まっ……」

逞しい背中がボク達の前に立つ。

白銀の魔導師に、立ちはだかる壁として。

「行けぇーーーーー！！

クロノ・ハラオウン！

ユーノ・スクライアぁーーーー！！」

目の前の背中を目に焼き付ける。

ボクはこの背中を忘れない……。

ボク達は何とかミッドチルダに帰ってくる事が出来た。

アースラの撃墜と乗員の全滅。

天夢　龍二とそれに操られていると思われる魔導師達の報告を済ませ、ボクはある1人の少年に会いに来た。

「おにいさん誰？

おとーさんとおかーさんのお友達？」

「っ！？……あぁ、ボクはクロノ・ハラオウンだ。

キミの両親に命を助けられた者だよ」

少年の問いかけに胸が痛む。

「おとーさんとおかーさんに救われた？」

でも、ボクはこの少年から逃げてはいけない。

「ああ、キミの両親は勇敢“だった”。
いや、ボクの職場の人間は、みんな勇敢“だった”」

「え～と、おにいさんはなんで泣きそうなの？
おとこのこは泣いちゃダメだっておとーさんがいってたよ？」

「ああ、ああ……そうだな…。
泣いてはダメだな…」

少年は何も知らない。
ボクを守る為に彼が犠牲になった事が……。

「ロウファ……キミの両親は……遠くに行って…しまったんだ…」

「でも、やくそくしたよ？
帰ってきたら遊園地にいこうって…」

その言葉がボクに止めを刺した。
ボクは、何も知らないロウファを抱き締め、謝る事しか出来なかった。

その後、ボクはロウファを養子として引き取った。

しかし、ロウファはボクの事をけして父と呼ぶことはなかった。

クロノさん

この呼ばれ方が、ボクを家族とは認めないロウファの見えない壁に感じた。

「……で、僕に子育ての相談にでも来たのかい？
クロノ・ハラオウン執務官」

「そんな筈ないだろう。
ユーノ・スクライア教導官」

ユーノ・スクライア

ボクの命の恩人にして、ケンカ仲間で親友。

「ボクがキミに会いに来たのは、特別遊撃部隊の件だ」

その言葉を聞いた瞬間、ユーノの表情が渋い物に変わる。

「特別遊撃部隊……ね。
本当に実現出来ると思ってるの？」

「レジアス中将は全面的に協力してくれる事を約束してくれた」

「レジアス中将が？
何かの間違いじゃなくて！？」

ユーノの言葉に頷く。

「最高評議会もバックについている。
ただ、ボクは今日から執務官を辞める事になったが…」

「執務官を辞める？」

「ああ、今日からボクは、地上本部、特別遊撃部隊、部隊長、クロノ・ハラオウン三等陸佐だ」

ユーノは言葉を失った様な表情をしている。
ボクは、それに構わず言葉を続ける。

「特別遊撃部隊は最高評議会の名の下に、一部隊が保有出来る魔導師ランクの規定を無視出来る。
特別遊撃部隊は基本は陸所属の部隊だが、必要とあらば、時空世界の何処にでも行く事が出来る」

「ちょっと待ってくれ！
なんなんだい、その無茶苦茶な部隊は！！」

自分の発案ながら、確かにこのデタラメさには呆れる。

しかし…

「確かにデタラメだ。
だが、それだけデタラメじゃないと……あの男には勝てない」

そうだ、あの男に勝つには……並大抵の力では足りない。

「キミが天夢　龍二に拘る理由は……家族を奪われたからなのか？」

「……理由を並べれば幾らでもある。
だが、そんな言い訳をなくせば」

ボクは…

「ボクの部下を、母さんを……」

エイミィを殺したアイツが憎い

最後の言葉は静かに響いた。
ユーノは納得した様な表情を浮かべる。

「分かった。
キミがもしも何かを理由に言い訳したら殴ってでも止めるつもりだったよ。
それで、僕は何をすればいいんだい？」

そして、ボクは特別遊撃部隊のメンバーを集め続けた。
ボク達の部隊は基本はアースラの乗組員の家族や恋人や友人達。
つまり、復讐者の集まり。
その彼等はユーノの教導で優しく、厳しく育てられていった。
全てが血塗られた戦いではない。
ボク達の裏の目的こそ天夢　龍二の抹殺だが、表の顔は市民を守る剣なのだから。

「クロノさん、僕は特別遊撃部隊に入隊するよ」

ロウファの言葉に息が詰まった。

ロウファはどうか分からないが、三年と言う時間を共に過ごす内に、ボクはロウファを本当の息子の様に感じていた。

そのロウファが、特別遊撃部隊に入隊すると言ったのだ。

最初は止めた。

息子にやがては死に行くであろう部隊に入って欲しくなかった。

「クロノさん、僕は父さんと母さんの仇が討ちたいんだ！！」

だが、止める事は出来なかった。

結局、ロウファは特別遊撃部隊に入隊した。

特別遊撃部隊の隊員は何度も天夢　龍二達に挑んだ。

だが、彼の仲間……高町　なのは達にすらボク達は敵わない。

仲間は、１人死に２人死に……１０が…１００が……１０００が死に行った。

「ロウファ、キミはこの復讐を終えたら何をしたい？」

そんな、殺伐とした中、ボクは息子にそう問い掛けてみた。

「復讐を終えたら……。

そうだな、僕は復讐を終えたらまず、父さんと母さんに新しい父さんの話をしに行くよ」

照れたようにそう言ってくれた息子の言葉が嬉しかった。

『ミッドチルダの皆さん、聞いてください』

この日、天夢　龍二の演説と共に時空管理局は崩壊が始まる。

ボクとユーノと数名の特別遊撃部隊の魔導師はアースラのドックにいた。

アースラの整備が終えるまで発進させる事は出来ない。

ボク達は敵となった市民相手に戦い続けた。

「ハラオウン部隊長、近くで負傷している局員を救助しました！」

「アースラの中に運びこめ！
防衛ラインを下げるぞ！！」

３０分間の防衛。

しかも、本来なら守るべき市民からの…。

部下の表情は苦痛に歪んでいた。
哀しみと苦しみに滲んでいた。

「クロノさん！
ロウファ・ハラオウン陸曹、他１０名只今帰投しました！」

１０人…

地上本部に赴いた隊員は３０人はいた。
彼等の姿が紅く染まっている事から、この場にいない２０名の末路は理解出来てしまった。

「……防衛に数名の魔導師を残し、アースラに撤退する！
志願者はいるか！！」

「部隊長、自分が残ります！」

「自分もです部隊長！！」

「さっさと行ってくださいよ。
後は私達に任せて」

彼等の言葉に頷き、ボク達はアースラに向かった。
また、ボクは仲間に背中を押されたのだ。
アースラは既に整備を終え、何時でも発進出来る様になっていた。
アースラを発進させようとした時、モニターに映像が映る。

『久し振りだね、クロノくん』

その姿が…
その声が…
全て……全てが懐かしかった。
だけど……そんな筈がない！

「エイ……ミィ？
バカな！エイミィはあの時！！」

『忘れたかな？

龍二さんのレアスキル』

「……死者の…蘇生」

その言葉で奴のせいだと理解する。

『アースラは見逃しても良いんだけど……クロノくんは駄目。
出てきてくれないクロノくん。
クロノくんを捕まえれば、龍二さんにご褒美貰えるんだ♪』

「エイミィ……キミは…」

ああ、天夢　龍二。
キミの切ったカードは確かに有効だよ。

S2Uを起動し、散った仲間達の“想い”にボクの“想い”を重ねる。

「ロウファ、キミにこの杖を託す。
ここには、今まで共に戦って散った仲間達とボクの遺言が刻まれている。
時が来たら……世界中に向けてボク達の想いを告げてくれ」

ボクは今まで、いろんな人に背中を押され、いろんな人に助けられた。

……今度はボクが背中を押す番だ。

扉に手を掛けた時、親友の姿が視界に映る。

「ユーノ、後の指揮は任せる」

「……当然だよ。
じゃあね……親友」

「ああ、さよならだ……親友」

言葉はそれだけで充分だ。
アースラの通路を歩きながらデュランダルを起動する。

「待ってくれ！」

呼び止める声に振り向く。

そこには、オレンジ色の髪の少年がいた。

「キミは？」

「貴方の部隊に助けられた局員です。
そんな事より、貴方は死ぬ気ですか！
それに、彼女の要求通り貴方が出ても…」

「分かっている。
おそらく、奴の性格上ボクにアースラの墜ちる様を見せ付け、絶望した所を殺すだろう」

「だったらここで！」

「だから！！」

少年の言葉を遮る。

決意と共に少年に言い放つ。

「このデバイスには、極めて強力な凍結魔法がプログラムされている。

ロストロギアを封じる程の……だ。

ボクはここで、彼女を道連れにし、キミ達を送り出す！」

「ふっ……ふざけないでください！
そんな事が認められるか！！
誰かを犠牲にして、自分達が逃げるなんて……」

懐かしい気がした。
そうか、この少年はあの時の……時の庭園にいた時のボクと同じなんだ。

「キミの名は？」

「ティーダ……ティーダ・ランスター」

「ランスター。キミにある魔法を託したい」

ティーダが渋々ながら拳銃型のアームドデバイスを取り出す。

「ランスター。
今すぐ分かれとは言わない。
現に、ボクだって昔は誰かが犠牲になる事が納得出来なかった。

キミはまだ子供だ。
だから……この魔法と共に生きてくれ」

「……分かりました。
分かりたくあるませんが……分かりました。
オレは生きます。
生きて生きて生き延びます！！」

その言葉に頷き、ボクはアースラを出た。

ボクがアースラを出ると、そこには槍の様な物を持つエイミィの姿があった。

……エイミィだけじゃない。

母さんもいる。

「クロノ、大きくなったわね」

「母さん……母さんはどうやら若返ったようですね」

「ええ、龍二さんの魔法のおかげで。
今は、クライドと一緒にいた時より幸せだわ」

天夢　龍二

本当に、ボクからすべてを奪ったな。

いや、“過去のボク”からすべてを奪った……か。

「それで、奴は母さんとエイミィならボクは手出し出来ないとでも思ったのでしょうか？」

「クロノ？」

キミの好きにはさせない。

アースラは墜ちない！

ボクの……ボク達の“想い”を継ぐ者達はこんな所で墜ちたりしない！！

「クロノくん！まさか！！」

「ボクがかつて“想い”を託された様に、ボクは息子に“想い”を託してきた！

人の“想い”は強い！

それは、どんな魔法よりも力よりも！！
天夢　龍二、キミはいずれ、人の“想い”の前に倒れるだろう！！」

だから、ボクはその“想い”を……守ろう。

「エターナル・コフィン！！」

ロウファ　視点

シグナムの剣が肩に突き刺さる。

防御したと思った斬激は脚を斬る。

何もかもが格上。

とうとう、僕の身体は堪えきれぬと倒れる。

『ロウファ、この遺言が流れているとしたら、その時が来たと言う事だろう』

クロノ父さんの声？

『どんなタイミングでこの遺言が流れているかは分からない。

だが、もしもまだ戦い続けているのなら…』

そうだ……立たないと。

僕は、この先にある散った仲間の“想い”を守らないと。

僕の様に、誰かの声を待っている人達の“想い”を守らないと！

『お前は、お前の“想い”を貫け。
人の“想い”は何よりも強い』
「やめておけ。
これ以上戦えばお前は……」
「退けませんよ。
僕は“想い”を守ると言った筈です。
同時に、僕はこの先にある“想い”に支えられている！」

行くよ……クロノ父さん。
僕はみんなの“想い”と共に！

『ロウファ……』
「僕は……」
『頑張れ！』
「倒れられない！！」

（後書き）

最後までお付き合いくださり有り難うございます。

さて、クロノ編でも登場しなかった転生者ですが……。

もしも、今回のを読んでくれた方でティーダ編とユーノ編が見たいと言う方がいれば出そうと思います。

えっ……なに？

なんでこんなに空気が冷たいの？

あっ、そこ！

石……じゃなくて岩！？

投げないで！

そんな物なげないでぇ～～！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3965r/

想い守る為に　クロノ編

2011年3月6日14時45分発行